

## あとがき

### まずは「体系的総まとめ」をめざす

「日本語構造伝達文法」は、40数年前の初期のころには、研究として成果の出るものかどうか、また体系的にまとまるものなのかどうか分かりませんでした。とにかく開始して、海外で日本語教師をしていた10年ほどの研究空白期間はあったものの、研究を進めてみると、成果が少しずつ出てきました。出てきた成果は、一定の分量になると、2000年から、とりあえずそのつど本にまとめるようになり、現在では、4冊になっています。しかし、当然のことながら、一つひとつの研究項目は体系的な配置になっていません。それらの項目は私の頭の中では体系的に並んでいても、4冊の本の中では研究の進んだ時間的な配列になっています。

現在、研究の全体を見渡すことができるようになって、それらの個別の研究項目を体系的に並べて、「日本語構造伝達文法」を整然とした形にまとめてみたいと思うようになりました。そこで、そのつもりで本書を書き始めました。

### それよりも「入門書」のほうが先

しかし、ある程度書き進むうちに、いま必要なのはそれよりもむしろ全体が比較的容易に把握できるようになることを目的とする入門書的なものではないか、と考えるようになりました。定年退職もして、自分は永遠に生きるわけではないということを自覚するようになり、いまは志のある人にできるだけ早く理解していただくほうが先ではないかと考え、方針を転換することにしました。

細かいことは4冊本の該当箇所にあたっていただくことにして、本書には原理・原則を中心に簡潔に記述するのがよいと考えました。さらに、入門書的なものなのだから、読者の理解の確認も考えたほうがよいと考え、課題も載せることにしました。記述した項目に関する質問を置き、それに答えることで内容を確認していただけないかと考えました。

その課題には参考までに解答例を付けましたが、この解答例を作成するにあたっては数名の方に解答例の案を作る形で協力を得ました。案の中にはよくできているものもあり、ほとんどそのままの形で解答例として使わせていただいたものもあります。

### 本書には続きがある？

本書では、基本的事項（S1章）、複主語（S2章）、態（S3章）を扱っていますが、「日本語構造伝達文法」はこれですべてというわけではありません。入門書として扱うべき項目はほかにもまだあります。それで、状況が許すようであれば、今後も執筆を継続していきたいと考えています。

## 本書を読んで答えられるようになったこと

本文中の86問に加え、次のような問いに答えられるようになったと思います。

- 1 格と格詞の違いは何ですか。 S1.1
- 2 主格には3種類あるのですか。 S1.3
- 3 「は」は格詞ではないのですか。 S1.4
- 4 「は」が付くと消える格詞はありますか。 S1.4
- 5 ゼロ主語、ハ主語、ガ主語はどのように異なりますか。 S1.5
- 6 「の」は格詞ですか。 S1.6
- 7 「だ」と「です」は元来この形でしたか。なぜ「です」の方が丁寧なのですか。 S1.7
- 8 「傘をさしている」の「て」はどんな意味ですか。 S1.9
- 9 「ぼくは高校生だ」「ぼくはうなぎだ」の違いは何ですか。 S1.10
- 10 「ある」の否定形は「あらない」なのに、なぜこれを使わないのですか。 S1.11
- 11 「彼と牛井を食べた」は言えるのに「牛井と彼を食べた」が言えない理由は。 S1.12
- 12 動詞「たべる」の語幹は「た」ですか、tabe- ですか。国語学では「た」ですが。 S1.13
- 13 「父は学生時代を東京で過ごしている」の「ている」は過去の進行形ですか。 S1.16
- 14 「電車に乗る人は切符を買った」の「乗る」は過去を表していますか。 S1.16
- 15 「彼女がいたら、……」という表現の表す12種類の状況を言えますか。 S1.17
- 16 「象は鼻が長い」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S2.1hs①
- 17 「こたつは眠くなる」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S2.1hs①
- 18 「私は暗闇がこわい」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S1.2hs②
- 19 「鳥は空が飛べる」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S1.2hs③
- 20 「来週はパーティーがある」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S1.2hs④
- 21 「私は彼に連絡がしてある」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S1.2hs⑤
- 22 「木が10本倒れた」はどんな複主体(二重主語)ですか。 S1.2hs⑥
- 23 -e, -(s)as-, -(r)ar- というのはどんな態ですか。 S3.1
- 24 -(s)as-e-, -(r)ar-e- というのはどんな基ですか。 S3.1
- 25 -e- が「他動」「自然生起」「可能」「態補強」を表すことを説明できますか。 S3.2
- 26 -(s)as-/(s)as-e- は「直接他動」「指示他動」「結果招来」「不阻止」を表しますか。 S3.3
- 27 -(s)as-e- は「可能」を表すこともあるのですか。 S3.3
- 28 「サ入れ」現象について説明してください。 S3.3
- 29 -(r)ar-e- は「受影」「自発」「可能」「尊敬」を表しますか。-(r)ar- も同じですか。 S3.4
- 30 「ラ抜き」現象について説明してください。 S3.4
- 31 古語にあった態詞 -ur- は現代語ではどの態詞になっていますか。 コラム1
- 32 古語の動詞はどのようにして数を増やしましたか。 コラム2
- 33 「日本語構造伝達文法」の立体モデルはどのようにして生まれましたか。 コラム3

今 泉 喜 一 (いまいずみ きいち)

1948年 群馬県生まれ(東京・板橋区育ち)  
1973年 東京外国語大学(モンゴル語学科)卒業  
1975年 東京外国語大学大学院修士課程修了  
1978年 国立国語研究所日本語教育長期専門研修受講  
1979年～1990年 国際交流基金より日本語教育専門家として派遣される  
・モンゴル国立大学(在ウランバートル)  
・在カラチ日本総領事館日本文化センター(パキスタン)  
・スペイン国立マドリッド・アウトノマ大学  
1990年 杏林大学外国語学部講師  
1993年 杏林大学外国語学部助教授  
1998年 杏林大学外国語学部教授  
1998年 韓国・高麗大学校客員研究員(1年間)  
2000年 杏林大学大学院国際協力研究科教授兼任  
2008年 博士号取得(学術博士)  
2012年 Marquis Who's Who in the World に掲載される(以後毎年)  
2014年 杏林大学定年退職

著書 『日本語構造伝達文法』(2000年版) 揺籃社, 2000  
『日本語構造伝達文法』(05年改訂版) 揺籃社, 2005  
『日本語構造伝達文法』(12年改訂版) 揺籃社, 2012  
『日本語構造伝達文法 発展A』 揺籃社, 2003  
『日本語態構造の研究—日本語構造伝達文法 発展B』 晃洋書房, 2009  
『主語と時相と活用と—日本語構造伝達文法 発展C』 揺籃社, 2014

E-mail: kilimaizu@yahoo.co.jp  
(イ)

「日本語構造伝達文法」ホームページ (「ニコデブ」で検索可能)  
<http://www.012.upp.so-net.ne.jp/nikodebu/>

日本語のしくみ(1)

—日本語構造伝達文法 S—

定価600円+税

---

2015年12月24日発行

著 者 今 泉 喜 一

発 行 者 比 嘉 良 孝

発 行 揺 籃 社

〒192-0056 東京都八王子市追分町10-4-101

TEL 042-620-2626

E-mail: info@simizukobo.com

印刷/(株)清水工房

製本/(有)宮沢製本

---

ISBN978-4-89708-361-2 C1081 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN978-4-89708-361-2

C1081 ¥600E



9784897083612

定価 本体600円+税

揺籃社



1921081006004